

公立小学校における保護者参加の情報教育支援の試み

3Y-01

根本秀政 丸山智子 三澤章生 山口正 澤田伸一[†] 中川正樹[†]

府中市立府中第一小学校 東京農工大学[†]

1 はじめに

教育の情報化への教師の取組みを円滑に進めることを目指して、平成9年度から11年度までの3年間にわたって支援の続けられた東京農工大学大学院生（以下、大学院生）による東京都府中市立府中第一小学校（以下、本校）向けパソコン授業TA（Teaching Assistant）プロジェクトは、所期の目標を達成して昨年3月末をもって一つの区切りを迎えた。

しかしながら、教師の資質が教育の情報化に充分対応できるレベルに到達していると想定できる場合であっても、現実には40人/20台の児童に教師1人でパソコン授業を運営するには困難が多いと考えられるにも拘わらず、文部省は今のところ1人の教師による授業指導體制を変えていない。

本校では第1学年から第6学年までのすべての学年に対してパソコン活用授業を推進しているが、平成12年度に入ってから授業運営は、クラス担任のほかにはGT（Guest Teacher）ならびにTT（Team Teaching）を1人づつ配することを基本態勢として位置づけている。また、大学院生に代わるパソコン授業支援者として児童生徒の保護者に参画を働きかけたところ、1学期中に延べ100人を超える方々から体験TA応募の関心を得られ、2学期以降はそのうちの2割弱（14人）の保護者がTA登録をして、交代で授業支援に参加して下さっている。

本稿では、必ずしも情報教育の専門性を有している方々ばかりとはいえない保護者による授業参画が、教師の授業運営にどんな役割を果たすことができるかについて、授業支援事例を基に考察する。

2 保護者による授業支援

2.1 要求分析（背景の把握）

3年間に亘る大学院生によるパソコン授業TAプロジェクト参画を通じて、本校の各学年担任教諭たちは情報教育への取組みを肌で実感することができた。とりわけ、教師自身による仕様提案に基づいて開発された授業支援ソフトウェアの存在は、児童生徒へ親近感を与える効果だけではなく、提案に関わった教師にとっての自信を支える契機になったと云える。

児童生徒の保護者にTA登録を働きかけた経緯には、平成11年度の3学期に授業支援ソフトウェアを使った授業公開（参観）をして、全学年保護者から強い関心と好評の得られていた実績が根底にある。大学院生参画によるTAプロジェクトに一区切りを迎えた段階で、担任教師1人によるパソコン授業運営には多くの困難さの伴うことを、くどくど説明するまでもなく理解が得られた所以でもある。

2.2 授業内容への関心の高まり

本校では、パソコン授業に限らずあらゆる分野でPTA活動が活発に行なわれており、保護者による学校に対する関心度はかなり高いと感じている。しかし、片や情報格差の問題が社会的に取り上げられている中で、情報教育とファミコン利用とを混同視して授業の健全さに危惧を表明する保護者の存在も決して少なくはない。

実際にパソコン活用授業を参観された保護者からは、「百聞は一見に如かず」の格言どおりに児童生徒の絶大な吸収力と自由な発想力を垣間見て、日頃子どもたちがどんな様子で取り組んでいるかを理解できたと感じと評価を戴いている。また、TA参加体験を通じて掴んで頂いた授業の様子は、家庭における親子の新たな会話の接点にもなり、情報格差の存在は社会だけの問題ではなく親子の間にも訪れると

An attempt to support studies on PC for a public elementary school by their parents.

H. Nemoto, T. Maruyama, A. Misawa, T. Yamaguchi, S. Sawada and M. Nakagawa

Fuchu Dai-ichi Public Elementary School
2-6 Kotobuki-cho, Fuchu, Tokyo, 183-0056, Japan

の感想さえ寄せられている。

2.3 TAの役割像（過度の期待を避ける）

情報処理技術を研究の専門分野にしていた大学院生の後を受けてのTAという意識が働いたためか、参画を呼びかけた初期段階では躊躇いを抱く保護者が圧倒的に多かった。保護者の中には仕事としてソフトウェア開発に携わっておられる方や、業務処理経験を持つ方々が多数存在しながら、いざ、小学校における授業支援となると腰の引けるものらしい。

そこでTAに対する役割の誤解を解くために、次のような期待像を掲げて参画を呼びかけ直すところとなった。

- ・大学院生の果たした役割をなぞる必要はない
- ・児童生徒と一緒に授業に参加して、どんなケースで子どもが躓くかを注視するだけでよい
- ・とまどいを感じている児童生徒を見つけたら担任（or GT）に知らせる
- ・担任の指導説明を聞き漏らした児童生徒へのフォロー、補足
- ・優れた操作、利用をする児童生徒を見つけたときには、感心し、誉め、説明を聞いてみる
- ・2人一組の協同作業が円滑かどうか注視する
- ・手空き状態の児童生徒の存在を担任に告げる
- ・集中力の欠けている児童生徒を励ます

2.4 保護者参画によるTA授業

本年度は奇数土曜日をパソコン利用授業に充てたことが幸いして、母親だけでなく父親を含めた体験参加者を数多く迎えることができた。金曜日を合わせると1学期中のパソコン授業日数は延べ13日であったが、体験TA参加者数は100名（約8名/日）を超えるに至った。初めてパソコンに触れる親御さんをはじめ、授業の様子を知りたいとの思いで参加された方、行き過ぎや将来に向けた不安がないのかをチェックする思いで参加された方々など、いろいろな思いを抱いて体験をして戴いた。

前節に掲げた緩やかな役割像を知ってTA登録して下さった方々は、いざ活動に参画されるやまさしく本業である保護者の目線で子どもたちを観察され、あるいは、担任やGTの指導の様子にもチェックを

入れる熱心さで、大学院生によるTAプロジェクトとは別の視点で授業運営を支える存在になっている。

また、保護者TA向けに開設したメーリングリストを通じて、TA間あるいは教師側との情報交換にも加わって戴いており、本校と保護者間の新しい情報交流手段の試みにも発展している。

3 児童生徒による受け止め方

第1学年から第6学年までのすべての学年に対応して戴いているが、児童生徒からの受け止め方は必ずしも一様ではない。大学院生によるTAとは違って親の目線で目配りをするせいか、授業態度や集中度の維持に鋭いチェックが入ることに煙たさを感じている面もある。また、高学年の場合には、保護者によるTAをあまり頼りにしない様子も見られる。

しかし共通している反応には、自分たちの夢中な姿を親に見届けてもらう喜びが挙げられる。一般教室での参観授業とは異なって、保護者自身にとっても参加型の授業運営であり、地域社会とのふれあいにもつながる側面を有している。

4 おわりに

本校における教育の情報化への自立性確立をスムーズに進展できたのは、大学院生による情報教育支援の第一ステップの存在が大きな要因といえる。また、同じような境遇が全国のすべての小学校にあてはまるわけではない。

しかしながら、第二ステップに相当する保護者を含めた地域社会との連携を求めれば、TAとしての参画は得られるであろう。本校においてもさらなる地域社会との連携を進めてゆきたいと考えている。これまでに支援を戴いた関係者のすべてに謝意を表して結びとしたい。

参考文献

- [1] 中川正樹, 澤田伸一, 根本秀政: "初等中等教育における情報教育支援の試み," 情報処理学会第57回全国大会 講演論文集(4), pp.327-328 (1998)
- [2] 根本秀政, 澤田伸一, 中川正樹: "公立小学校に対する情報教育支援の試みから得られた幾つかの知見," 情報処理学会第57回全国大会 講演論文集(4), pp.329-330 (1998)
- [3] 澤田伸一, 根本秀政, 中川正樹: "情報工学系大学院生による公立小学校での情報教育支援," 情報処理学会情報教育シンポジウム論文集, pp.87-94 (1999)